

幕末の観世勸進能

古川, 久

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

3

(開始ページ / Start Page)

117

(終了ページ / End Page)

128

(発行年 / Year)

1977-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020267>

幕末の観世勸進能

古川 久

一

昭和51年の春、野村狂言団に同行しロンドンを訪れた際、たまたま仏教学者の兜木正亨氏に面談する機を獲た。氏は多年、敦煌出土の法華經研究を志し度々ケンブリッジ図書館へ通われるうち、その阿須頓文庫に納まっている『忍ぶ艸加美』なる卷子に注目して、全巻をフィルムに収められたという。歌舞伎の画なども入っていると聞き、帰来焼きつけ写真を見せていただくと、なる程種々な風俗資料が貼り交ぜてある。それも道理、巻首に左のような識語がある。

此一卷は轂下の蕃盛にしたかひ文化以降市井の沿革風俗の済躰につけ街に嚮き坊間に行れし一昏半幅のものを輯めて古皮籠に余りしをこたひ年序にしたかひて次第をなし一卷とは成せり……

終りに「天保癸卯仲春 月岑識」と見えるが、言うまでもなく月岑は斎藤幸成（文化元年～明治11年）の号で、彼は『武江年表』（前篇―嘉永2年刊・後篇―明治11年脱稿）や『東都歳時記』（天保9年刊）または『声曲類纂』（弘化4年刊）などの編者であり、とくに『江戸名所図会』（天保7年刊）は祖父幸雄・父幸孝の業を継いで、ついに校刊にまで漕ぎつけた大仕事であっ

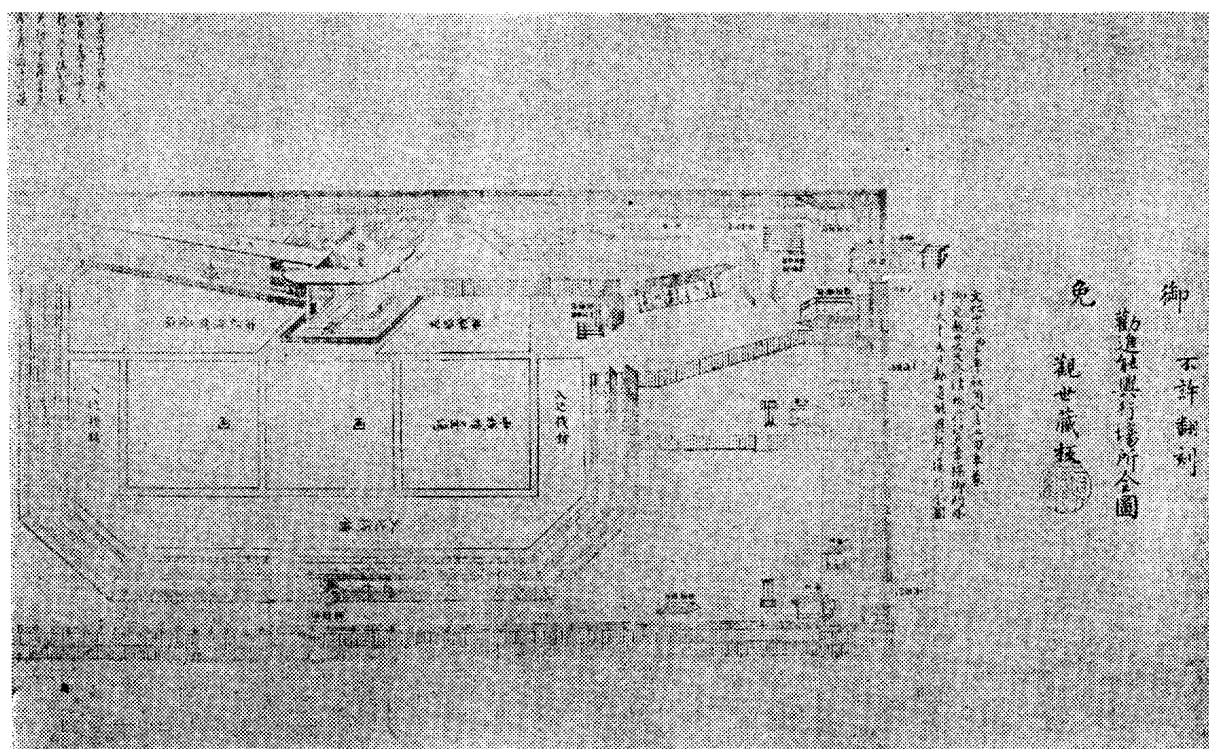
〔写真A〕

『忍ふ艸加美』所収

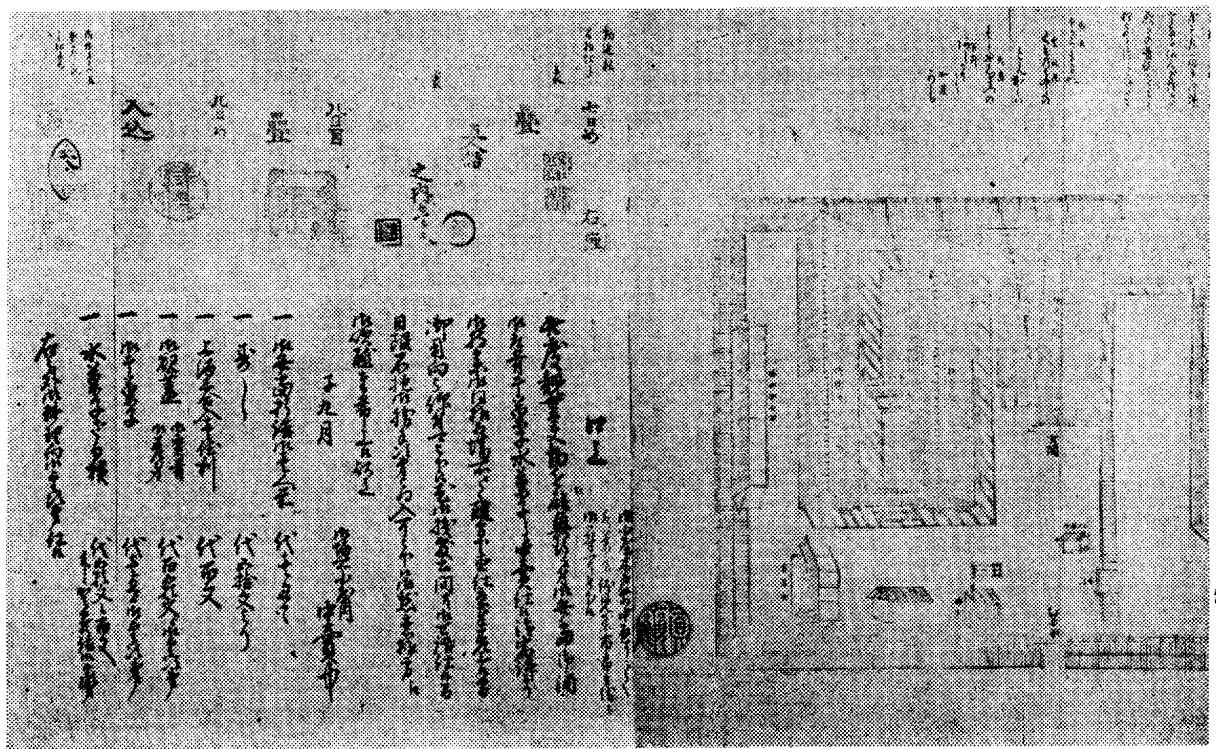
文化十二年勸進能興行場所全図

文化十三丙子年秋閏八月上旬奉蒙
御免観世大夫秦清賜於江戸幸橋御門外
晴天十五日勸進能興行場所全図

丙子の十月二日興行の
二日目に当り雨天
夜に入て停む同夜
災ありて舞台樂
屋其外一円に灰燼



となる何人の戯にや
 厥日の番組をもて
 狂哥につらねたり
 鞍馬
 くらまされ
 雲林院
 くものはやしの
 もえ出しは
 矢島
 もしやしまつの
 声
 あしかりし
 加茂
 かも
 勸進能
 見物切手
 表
 裏
 御組屋敷并
 惣名主へ配り
 し切手也



た。さらに江戸最後の催しとして勸進能の代表扱いされる弘化五年の宝生勸進能については、絵巻を編んで能楽への深い関心を示した人でもある。この『忍ふ艸加美』の中に、二枚の木版刷り勸進能場所図が含まれていたもので、ここに紹介したいと思う。

二

その一は文化十三年観世大夫興行の分で、写真Aがそれである。同じものが能楽研究所や観世新九郎家文庫にも所蔵されているが、袋紙の上書と覚しい最初の三行分と、終りの「勸進能切手」及び「口上」は無い。これらは無いのが原形で、『忍ふ艸加美』分は首尾に別紙を貼りつないだものである。興行場所図そのものも舞台左端部あたりで分離する、二枚のものを貼ったのに相違ない。また図の上欄に見える書き入れも無論『忍ふ艸加美』独自のものである。

この催しについては、月岑自ら『武江年表』文化十三年丙子八月閏の項に「○九月二十二日より、幸橋御門外畠地に於いて、観世大夫（秦清暘）勸進能興行あり（日数は晴天十五日を期とす。興行の間場中より失火して、舞台棧敷楽屋一円に焼亡す、再び普請をなして興行し、翌年九月に至りて終る）」と記しているし、能関係の雑誌にも何度か紹介されていて、比較的著名である。まず『能楽』昭和41年1月号所載の観世清之「勸進能の話」には、

文化年中の勸進能興行の時失火がありまして更に建直して興行し一年余の日数を費し多くの借財が出来て能装束なども多く三十間堀の江島屋といふ質屋へ這入ったといふ話でしたが是れが江戸市中に於ける観世家勸進能では最後のものであります。

とある。また同誌には、典拠を明記していないが当時の記録に相違ない「観世勸進能興行之記」も紹介されており、月行事や名主の記録をまとめ、終りを左のように結んでいる。

一、文化十三丙子年九月廿二日初日然るより後彼は延引打続翌文化十四丁丑年九月十一日に至り漸く晴天十五日興行首尾能相済申

候子九月廿二日より丑九月十一日迄日数三百四十五日相掛り申候（中略）

右観世太夫勸進能の儀は先年寛延三庚午年三月神田筋違橋御門於広小路興行有之候処当文化十三丙子興行迄六十八年に相成候

さらに『能楽画報』明治43年3月号〜44年2月号（途中数回休載）にも、始めに「左は観世家の秘蔵本にして、全く外見を許さざりしが、今回我が画報に於て、特に其許を得たるを以て、茲に之れを掲載し、遍く世上に発表する事とはなしぬ。然してこは斯道歴史界に於て、少なからざる参考となるべき秘蔵本なり」と断つてあるように、観世宗家旧蔵の詳細な記録が紹介されている。例えば興行場所全図についても、「場処絵図も此度は大美濃横二枚つぎにて見事に摺候て、五十文ヅツ、昔とは違ひ雪隠など書不申候」とか、「右場処絵図は、幸橋外と本町二丁目大通近甚となり幕を張り、立札を出し売申候、大美濃横二枚つぎにて、一枚五十文」などと述べている。また「口上」も左の通り記録してある。（少々脱落があるので写真により訂す）

口上

此度観世太夫勸進能興行ニ付御弁当御酒御取肴干菓子水菓子とも中売仕候御宿許より御持参御同様御場所ニて随分下直仕立奉差上候間御用向被仰付可被下候尤御棧敷土間共御世話仕候間日限不抱御勝手次第被為入可被下候御懇意様方江御吹聴奉希上候以上

子九月

御場所小屋内

中売中

一御弁当折詰御老人前

代老奴つゝ

一すし

代五拾文より

一上酒三合入老德利

代百文

一御硯蓋 御煮肴
御差身

代百五拾文々御望次第

一御干菓子

代老奴々御望次第

一 水菓子ざる積

代五拾文の百文
外三篇籠詰御望次第

右之外御料理向御望次第仕候

御小屋木戸前中通りニて水茶屋伏見屋市郎兵衛与御尋可被下候

末の二行分が『忍ふ艸加美』で「口上」の下に位置するのは、写真では不明瞭ながら切り離して貼り付けたのであろう。

一方、『能楽』昭和11年2・4月号所載の、柳沢澄「文化の勸進能」も同じ興行に関する考察で、当時の観客の見聞記録の類が紹介されていて興味深い。4月号分には十五日間の詳細な番組も載せられている。この勸進能は長期にわたったためか番組に変更が多かったが、柳沢氏引用のものは、完全ではないものの（例えば八日目の望月は実際には小鍛冶に変更されたりしい『鍊仙』昭和48年7月号、表章「百々裏話」参照）、実際に演じられた番組と認められる。その曲名だけを左に転記して置こう。（括弧内は能楽研究所蔵の「文化十三年勸進能番組」に見られる予定曲）

初日―高砂・末広がり・田村・千鳥・羽衣・福の神・船弁慶・祝言金札

二日目―加茂・八幡前・八島間那須・楽阿弥・雲林院・鬼の槌（鬼の継子）・芦刈・鞍馬天狗白頭

三日目―翁（ナシ）・弓八幡（白楽天）・恵比須毘沙門・実盛・金岡・東北（桜川）・太刀奪・夜討曾我間大藤内・祝言岩舟（春日龍神）

四日目―西王母・餅酒・項羽・餌差十王・松風・子盗人・熊坂・善界

五日目―三輪・入間川・鉢木・腰祈・蟬丸・花折新発意・阿漕・土蜘蛛

六日目―大社間神子神主・舟渡聲・小督・三人片輪・江口・首引・葵上・海人赤頭

七日目―張良・鍋八撓・七騎落・川上座頭・山姥白頭・朝比奈・善知鳥・紅葉狩

八日目―邯鄲・墨塗・忠信・武悪・半蔵・称宜山伏・望月（実際には小鍛冶）・絃上

九日目―蟻通・鞍馬参・安宅・井碯・龍田・唐相撲・俊寛・舍利

十日目―輪藏・業平餅・橋弁慶・素襖落・草紙洗・骨皮・道成寺・鶉飼

十一日目―翁(ナシ)・嵐山・萩大名・大仏供養・柿山伏・当麻・宝の瘤取・鉄輪・車僧

十二日目―翁(ナシ)・和布刈(合甫)・靱猿・盛久・鎌腹・碓・泣尼・天鼓・野守

十三日目―翁(ナシ)・竹生島・鼻取相撲・東岸居士・こんくわい・恋重荷・井杭・通小町・烏帽子折

十四日目―翁(ナシ)・玉井・二人袴(二人大名)・禅師曾我・鈍太郎・富士太鼓・止動方角・石橋・融

十五日目―翁(ナシ)・鶴亀・麻生・春栄・宗論・吉野天人・氏結・安達原・乱

もこの興行は十九世観世大夫清興が願い出て文化十二年興行のはずだったのを、その清興が同年九月六日に急逝したため、後嗣の二十世清暲が引き継ぎ、翌年に延期して興行することになったのである。文化十三年九月三日始めの予定が八月四日の大暴風で舞台を始め被害を受け、九月二十二日になりやっと初日を迎えた。二日目の二十三日は雨で延び、十月二日に演ぜられたが、その夜の出火で全焼の厄に会う。写真Aの上欄の書き込みもそれに関連しており、『武江年表』もこの火災に言及している。開始以前の風害はともかく、この火災は大きな損害で、三日目が再開されたのは翌年四月十九日となる。この間に観世大夫は再開のための財政的方途を講ずるのに奔走したようで、結局は幕府から千五百両という大金を借用する方法が採られた。

それを物語るのが国会図書館所蔵の旧幕引継書中にある、『観世大夫借金一件』である。同書は文化十四年三月から文政年間に至るまでの、一件文書十数通分を合写したもので、幕府が塩問屋・仲買衆の積立金から千五百両を観世大夫に貸与したことや、大夫がそれを年三朱の利息で十六年年賦により返還していたこと、または返納の方法が煩わしいので中途から配当米を扱う御蔵宿の坂倉屋万右衛門に引請けさせたことなどが、一々記録されているのである。

三

右の旧幕引継書には「観世太夫義当春類焼仕返納差支候ニ付来々卯年勧進能興行仕候時節迄上納年延奉願候 文政十二年十二月十四日 坂倉屋」の一通が見当る。いわゆる己丑の大火で追いつちを受けた形となり、再度勧進能を催さなければ返納の方途も立たぬというのである。翌十三年三月に清暲は亡くなるが、二十一世観世大夫を継いだ清長は予定通り事を運ばざるを得ない。『武江年表』天保二年辛卯の項に「○幸橋御門外に於いて、観世太夫勧進能興行あり。十月十六日を初日として晴天十五日の間興行の定なりしが、雨天其の外にて翌年へかゝり、日数の外日延興行あり、辰の六月に至りて停む(興行の月貴賤群集せり)」と見え、この時の木版刷興行場所図が『忍ふ艸加美』所収のもう一図(写真B)である。

この興行については樋口秀雄「天保二年の勧進能」(『美術』昭和30・6・20)が詳しく、幸い同氏からコピーを恵与されたので、少し長く引用して置きたい。

初日興行は天保二年十月十六日で、これは当初板刻された十五日間の番組によって、当日明時の六半頃より初まって夕七ツ時頃迄に翁、高砂と番組を済ませた。二日は二十三日、三日目は二十六日に、四日は二十九日、五日目は翌月四日とここまでで興行の三分の一を進んだが、何しろ観衆多く、畳場から入込場はもちろん、通り路まで群衆の混雑を極めた。ために十五日興行を十日間延長し二十五日興行とし、これまで手配した札の割直しを行い、十八日間おいた十一月二十二日に六日目の興行を挙行した。このときの観覧者は「撰要永久録」によると、初日から五日目までは畳場が九百前後、入込場すなわち大衆席は二千五百から三千を算し、札割直し後六日目からは畳場で二百五十内外、入込場で前者の半数の千五百以内文字通り半減している。

とその盛況を伝え、さらに続いて、

しかし二十五日間を通じての観覧者数は当初の札数と大きな開きはないから、混雑さを免かれるための札の割直しであった訳で、予

想されたものであろうか。しかし一方では第十九日すなわち翌三年四月二十六日興行では、当日になって「是ハ今日見物多候付番外也」と予定の番組を変更しているなどがあって、これは入場者、興行期間両理由にもとづくところにあったと思われる。

と委細が尽くされている。さらに氏は「実際にもとづく番組を示そう」として、左のように記しておられる。(後に記す番組の別資料により、少し体裁を改め誤植を訂した)

初日10・16―翁・高砂・末広がり・田村・いぐる・羽衣・花見座頭・船弁慶間船唄・祝言金札

二日目10・23―翁・加茂・二人袴・八島間那須・鈍太郎・半部・太刀奪・夜討曾我間大藤内・祝言養老

三日目10・26―翁・嵐山間猿聲・鼻取相撲・実盛・宗論・熊野・子盗人・大仏供養・祝言岩船

四日目10・29―翁・氷室・靱猿・経政・井礪・草紙洗・米市・熊坂・海人赤頭三段舞

五日目11・4―翁・代主・連歌毘沙門・巴・伯母が酒・雲林院・骨皮・安宅・殺生石

六日目11・22―翁・竹生島・鍋八撓・忠度・比丘貞・松風・苞山伏・弱法師・紋上

七日目11・25―翁・右近・鶏聲・鉢木・蟹山伏・百万・唐相撲・善知鳥・大会

八日目11・29―巻絹・業平餅・橋弁慶・蟬・隅田川・素袍落・咸陽宮・舍利

九日目1・16―翁・和布刈・船渡聲・俊寛・武悪・吉野天人・首引・道成寺・車僧(正月能初二付翁有之)

十日目2・26―小鍛冶・入間川・七騎落・泣尼・桜川・不聞座頭・山姥・野守

十一日目3・5―邯鄲・宝の槌・土蜘蛛・花子・雲雀山・祢宜山伏・鉄輪・融

十二日目3・7―西王母・蚊角力・俊成忠度・附子・葛城・花盗人・錦木・松山鏡

十三日目3・16―皇帝・相合烏帽子・芦刈・こんくわゐ・三井寺・三人片輪・藤戸・烏帽子折

十四日目3・25―九世戸・八幡前・忠度・狐塚・蟬丸・花折・春栄・合甫

十五日目 3・29―輪藏・児流鎚馬・兼平・大般若・源氏供養・棒しぼり・鞍馬天狗・大瓶狸々

十六日目 4・9―翁・江島・歌仙・生田敦盛・腰祈・班女・鏡男・夜討曾我・鵜飼

十七日目 4・11―翁・大社・文蔵・敦盛・千鳥・花筐・菌山伏・望月・鍾馗

十八日目 4・19―翁・道明寺笏拍子・早漆・清経・寐音曲・龍田・唐相撲・阿漕・羅生門

十九日目 4・26―翁・難波・二人大名・景清・鎌腹・三輪・鬼の槌・石橋・張良・入狂言三人片輪(是ハ今日見物多候付番外也)

廿日目 5・16―翁・志賀・鴈磔・知章・神鳴・葵上・釣狐・大仏供養・船弁慶

廿一日目 5・23―翁・東方朔・若菜・鶴・土筆・碓・伯養・通小町雨夜之伝・烏帽子折

廿二日目 6・6―翁・逆鋒・唐相撲・小袖曾我・釣針・遊行柳・止動方角・熊坂・紅葉狩

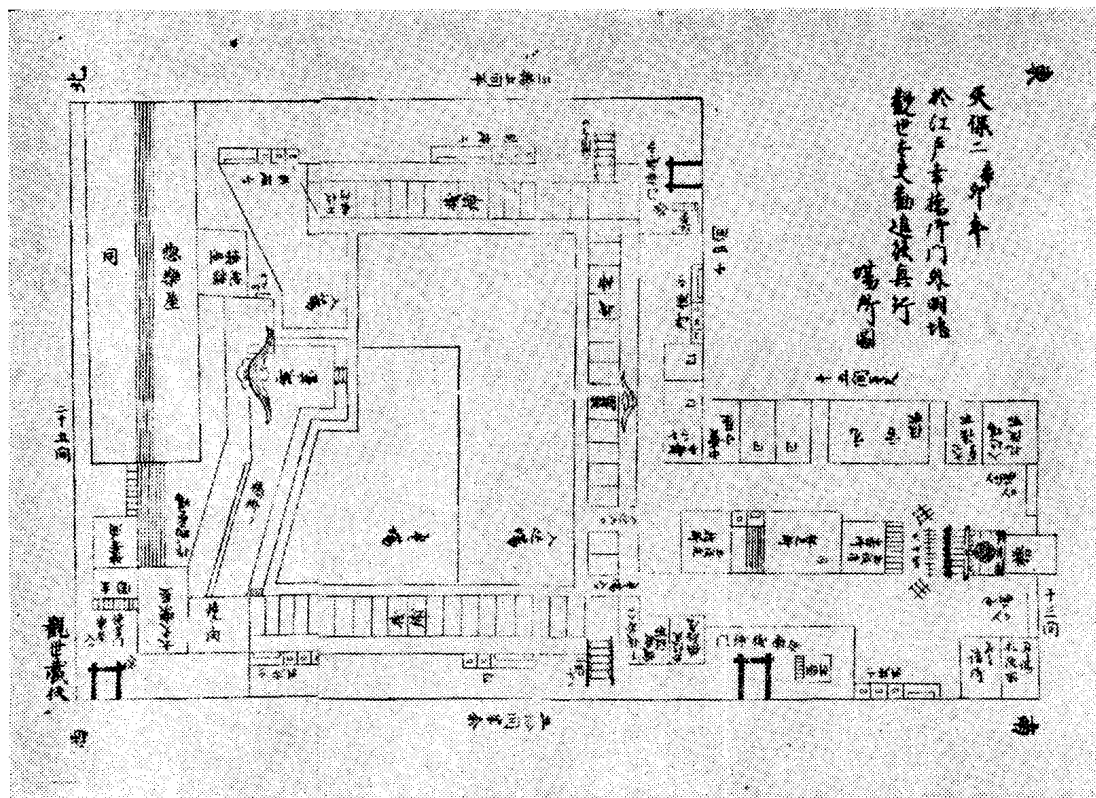
廿三日目 6・21―翁・玉井・水懸聲・小督・瓜盗人・唐船・悪太郎・道成寺赤頭・項羽

廿四日目 6・22―翁・和布刈・墨塗・盛久・惣八・富士太鼓・朝比奈・正尊起請文・善界

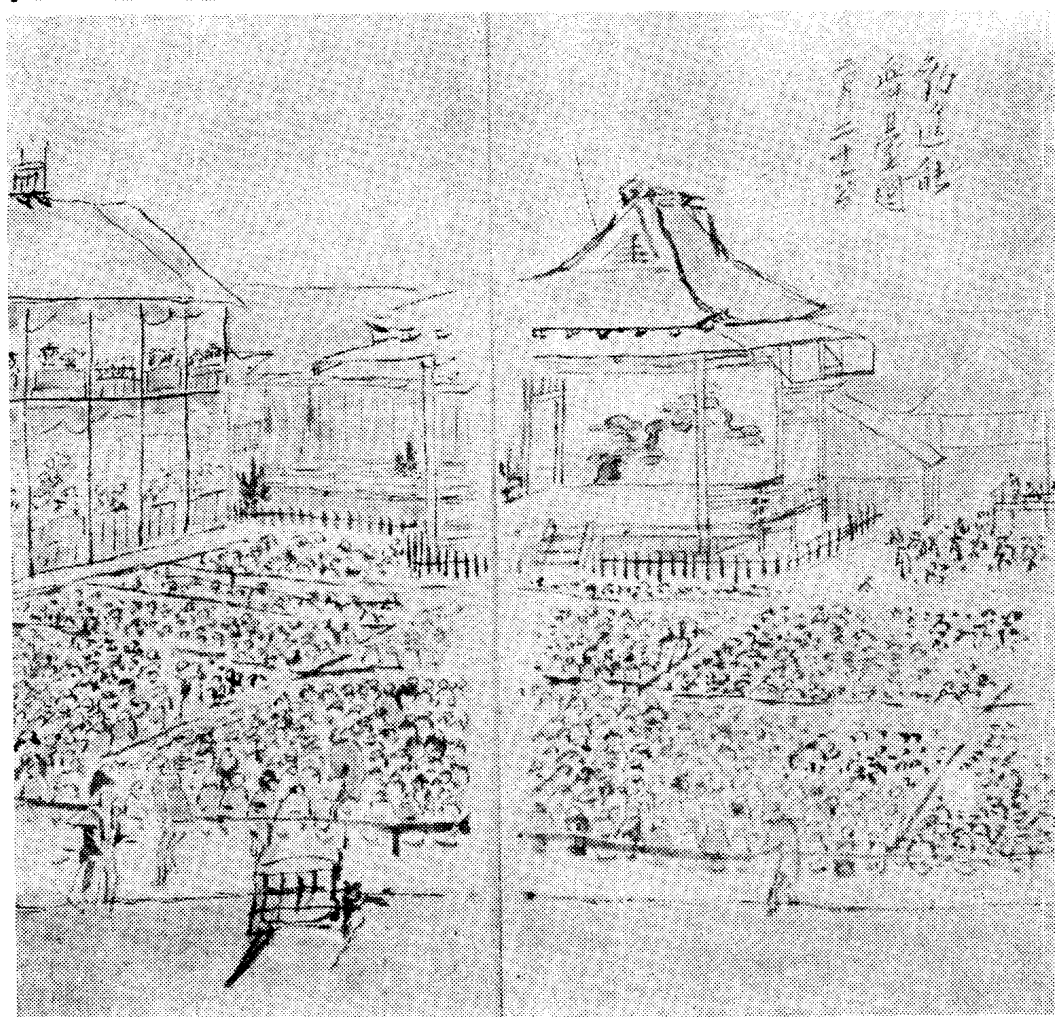
廿五日目 6・26―翁・鶴亀・麻生・簾・茶鬘座頭・杜若・福の神・石橋・狸々

この番組については味方健氏の御好意で河村隆司氏蔵『観世勧進能番組』を借覧し参照することができたが、右との異動としては、日附の無いこと、九日目の「和布刈」が「弓八幡」になっていること、同日の「正月能初ニ付翁有之」の注が無いこと、十六日目の前に「勧進能日延」と題されていること、十九日目の入狂言の記載が無いことなどである。

そして渡辺華山の観能図が彼の素描帳の一冊である『客座掌記』に残されていることは、樋口氏の右論考を始め菅沼貞三『華山の研究』や、『文人画粹渡辺華山』などによって知られる。中に舞台図がありその右肩に二月二十六日と記されているように(写真C参照)、十日目に当り、番組順に全曲目が巧みな描線で写してある。記入した色名を便りに後に彩色を施したので、一層貴重な資料となっている。



〔写真B〕『忍ふ艸加美』所収
天保二年勸進能興行場所全図



〔写真C〕 渡辺崋山画「勸進能舞台図」
（『客座掌記』の内）

四

以上幕末の二度にわたる一連の観世勸進能が、市井風俗の資料として歌舞伎画や祭礼図とともに月峯の手でまとめられたのは、式楽としてややもすると固定化しやすい能楽を、血の通う大衆芸能として再生させるに効のあったものであることをよく物語っている。興行の動機に経済的な利益を求め、その方法に強制的な割当てが用いられていたのは事実である。しかしこの形式が単に能楽維持に止まらず、演出面はもとより装束の上にも種々工夫が加えられ、演劇本来の役目である大衆相手の姿に展開させた功績を否定することはできない。

かつて明治能楽史を概説した際、弘化の宝生勸進能から書き出し、明治五年に梅若実が晴天十日間の日数能を企て、同八年には金剛唯一も同形式の勸進能を催して、能楽再生の基礎を固めたのに心をひかれた。その後偶然の機会に奈良で寛永の金剛勸進能舞台図を見つけ『金剛』昭和36年9月号参照）、またこの度図らずも観世の資料に接し、今後とも大方の御示教を仰ぎながら、勸進能の意義を追求して行きたい。兜木氏にはもとより、長田勝彦・表章・田辺由太郎・樋口秀雄・味方健諸氏のお力添えに対し、心から感謝の意を表する。